

要求水準とポシブル・セルフ、自尊感情、課題への 関与度の関連について

磯崎 三喜年・黒石 憲洋

問題

人が自分自身をどう捉えているかは、その個人の社会行動と密接な関係にある。そして、こうした自分自身に対する捉え方は、多くの場合、自己を取り巻く他者の影響を受け、他者との関わり方によって変化するとされている(例えば、Tesser, 1984)。また、現実の自己をどう捉えているかだけでなく、どういう自分になりたいか、あるいはどういう自分にはなりたくないか、という自己の未来への志向性もまた、個人の行動を大きく規定する。つまり、自己に関する捉え方や自己に関する知識には、自分自身の属性や役割、性格などの現実の自分という側面と、将来このようになりたい、あるいはなりたくない自分といった「可能性としての自己」(Markus, 1991)も含まれる。

人は、自己をどの程度正確に把握しているだろうか。確かに、人は、自分のことをある意味でよく知っている。しかし、自己に関して必ずしも明確ではないものの、将来的な可能性に関わる自己の領域が存在することも無視できないように思われる。この領域は、人々が自分の可能性や将来をどのように認知しているかという点に関連している。Markus & Nurius (1986)は、こうした領域を、ポシブル・セルフ (possible selves : 可能性としての自己) と名づけている。つまり、ポシブル・セルフとは、人々が持っている自分の

可能性や将来に関連した自己に関する知識である。つまり、「将来こうなりたいと切望する理想の自己像」であり、「そうなるかもしれない自己の姿」である。そして、「そうはなりたくないと思う自己の姿」でもある。「そうなりたい」自己とは、成功者としての自己、尊敬される自己などであり、「そうはなりたくない」自己とは、孤独な自己、ゆううつな自己などであるという (Markus, 1991)。Markusは、これらのポシブル・セルフ概念の有効性、そして、それが個人の自己概念の重要な構成要素をなしていることを指摘している。つまり、力動的な自己概念としてのポシブル・セルフこそが、個人の活動において重要であるとしている。確かに、それまで、自己の中核的側面に注目するあまり、潜在的な自己にはそれほど関心が払われてこなかったきらいがある (Gergen, 1972)。その意味でもポシブル・セルフの概念は興味深いものといえる。

ポシブル・セルフは、比較的固定的な自己概念と具体的な行動をつなぐ橋渡しをする機能を持っている。つまり、個人の現在の状態から将来の状態への変化を明らかにするものであり、個人の動機と具体的な行動をより直接的に明らかにするものとされている。また、それは、自己概念の力動的な諸特性、すなわち、動機づけ、認知の歪み、変化などに関連している。言い換えれば、希望、恐怖、目標、動機、願望などの認知的成分をなし、動機づけの力動性、個々人に特有の意味や組織化、あるいは方向づけを与えるものとされている。多くの場合、人は、なりたい自己には接近し、なりたくない自己を回避しようと動機づけられているのである (Markus & Nurius, 1986)。

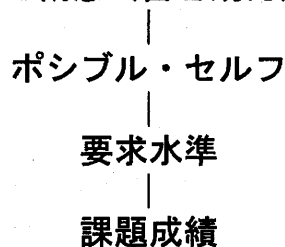
したがって、「こうなるかもしれない」という見通しは、それが望ましいものであれ、逆の場合であれ、人々の行動と密接に関連し、また、行動の個人差をも説明することができるかもしれない。しかし、ポシブル・セルフに関する実証的な研究はあまり行われていない。したがって、その有効性についても必ずしも明らかになっているとはいえない。ポシブル・セルフに関する実証的研究を行う必要のあるゆえんである。

ポシブル・セルフの機能に関しては、比較的短期的な将来に関する予測と、

かなり長期にわたる将来に関する展望とに分けることができると考えられる。本研究では、要求水準との関連において、ポシブル・セルフのもつ機能とその概念の有効性について検討することを目的とし、比較的短期的な将来に関する予測（状況即応的な自己概念としてのポシブル・セルフ）を扱うことにする。要求水準という目標設定に際して、ポジティブな目標設定をする場合とネガティブな目標設定をする場合とがある。また、現実の自己の成績を踏まえて、どういった目標を設定するかはポシブル・セルフによって変わってくるように思われる。

ところで、Bandura (1977) は、要求されている行動を遂行する能力があるかどうかについての個人の信念を、効力予期と呼んでいる。Markus & Nurius (1986) は、こうした効力予期は、それらが具体的で明瞭に想像されたポシブル・セルフと結びついている程度に応じて影響力をもつとしている。そして、そうした効力予期の概念と類似の概念として自己効力の用語を用いている。これらから、自己概念と課題遂行場面における実際の行動に関して以下のような関係が予測される。

固定的な自己概念（自己効力／自尊感情）



要求水準の設定の仕方は、自尊感情やその他のパーソナリティ特性と密接に関連している。しかし、Markus (1991) のいう状況即応的自己としてのポシブル・セルフは、作業課題と自己のおかれた状況との関連から、その状況にふさわしい自己についての見通しを持つものといえる。この状況即応的自己としてのポシブル・セルフという概念を用いることによって、潜在的な

自己の姿をより明確にすることができるように思われる。

なお、これまでも要求水準それ自体に関する研究（関, 1974など）、個人の自尊感情やその他のパーソナリティ特性との関連に関する研究（落合, 1979など）はいくつかみられる。ここでは、特に、ポシブル・セルフと自尊感情とで、要求水準の設定の仕方に、どちらがより大きな影響を与えるかが問題となる。将来的な見通しに関しては、自尊感情よりもポシブル・セルフの方がより影響を与えるように思われる。そして、課題成績のいかに拘らず、自分の目標レベルに執着する傾向は自尊感情と関わるように思われる。したがって、要求水準における目標差スコア（GDスコア）については、自尊心レベルの影響が強く作用すると推測される。つまり、状況に応じた柔軟な将来的な見通しとしての要求水準は、ポシブル・セルフと強く関わり、状況に拘らず自己の目標に固執する傾向は、自尊感情と強く関わるように思われる。

ところで、課題の実際の遂行レベルは、課題の自己にとっての重要性（関与度）の認知と相互に密接に関連している（例えば、Tesser & Campbell, 1982; Tesser & Campbell, 1983）。自己の遂行レベルが相対的に高いときは、自己にとってその遂行の持つ意味は大きく、そうした課題は、自己にとっての関与度が高く重要なものと認知されやすい。逆に、遂行レベルが低いときは、そうした課題の自己にとっての関与度や重要性を下げようとするのである。これは、自己のよさを保つひとつの方略といえよう。したがって、実際に課題を遂行する前後で、その遂行レベルと課題の自己にとっての関与度がどのように関連するかについても検討を加えることにする。

方法

被験者 大学生男子20名、女子16名の計36名であった。

課題 要求水準を測定するために用いた課題は、大小分類検査器（竹井機

器工業)であった。これは、視触覚弁別検査器とも呼ばれ、利き手で、大きさと厚さの異なるコイン(全部で50個)をひとつづつつまみ、1分間の間にできるだけ数多く、箱の中の穴(コインの大きさに対応して長さや幅が異なる)に入れていくという課題である。このように、時間制限法によって作業量の測定を行うが、一般的な被験者では、1分間で50個すべてを入れるのは無理であった。したがって、50個すべてを100%としたとき、どの程度の割合で遂行が可能かを尋ねることとした。

要求水準に関しては、一般的な要求水準とされている期待水準「どのくらいできると思うか」(高木, 1958)をその指標として用いた。また、教示の方法は、佐治(1951)による期待水準の教示を参考にした。

質問紙 本研究では、フェイス・シートを含め、11ページからなる質問紙を作成した。

第1ページ フェイス・シートであり、被験者に年齢、性別を記入させた。

第2ページ 自尊感情を測定するため、自尊感情尺度(Rosenberg, 1965)の10項目(山本・松井・山成, 1982)に回答を求めた。回答は、「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法であった。可能得点範囲は、10-50であった。

第3ページ 課題開始前の課題に対する関与度および課題終了後の自己の状態としてのポシブル・セルフを問う項目であった。

課題に関する関与度は、

1. 興味がある
2. 面白そうだと思っている
3. このような課題は得意な方だ

の各項目に5件法で回答を求めた。関与度は、3項目の合計得点による。

ポシブル・セルフの質問項目 ポシブル・セルフが、具体的なイメージを指すものであり、動機づけにおける認知的成分であることを考慮して、質問項目を作成した。質問項目作成の基準としては、達成動機に関するさまざまな理論をもとに、要求水準に関係があると考えられる要素をいくつかとりあ

げた。具体的には、社会的達成欲求、個人的達成欲求、自尊的達成欲求、成功・失敗に関わる感情などの要素であり、これらの項目について、Atkinson (1964) の成功達成、失敗回避の傾向の考えを参考に、以下の8項目を作成した。

1. よくできたのでうれしい
2. あまりできなかったので、自分の力からすればやむをえない
3. 何度やってもうまくない
4. 価値ある達成がなされた
5. あまりできなかったのがっかりしている
6. よくできたが、自分の力としては当然のことだ
7. 他の人よりできなかった
8. 何度もやっているうちにうまくなっている

なお、このうち、2. 3. 5. 7の各項目は逆転項目である。可能な得点範囲は、8~40であり、得点が高いほどポジブル・セルフが高いことを意味している。

以上、結果として、質問項目は、動機づけにおける誘因的成分としてのポジブル・セルフが強調された。

第4ページから第6ページ 第1回から第3回の課題に対応する要求水準とその要求水準に対するイメージの明瞭さ、および課題成功に関するイメージの明瞭性を問うものである。要求水準に関しては、「ひとつもできない」を0%、「全部できる」を100%として、課題成功を百分率で回答させた。

イメージの具体性は、要求水準で答えた課題成功の程度(%)をどの程度具体的にイメージできるかを、5件法(1:全くイメージできない~5:はっきりイメージできる)で答えさせた。さらに、以下の各項目の課題成功をどの程度具体的にイメージできるかを尋ねた。

1. 80~100%成功する
2. 60~80%成功する
3. 40~60%成功する
4. 20~40%成功する
5. 0~20%成功する

第7ページ 前半の1回から3回の課題を終了した時点での課題に対する関与度および課題終了後の自己の状態としてのポシブル・セルフを問うものである。質問項目は第3ページに準じている。

第8ページから第10ページ それぞれ後半の4回から6回の課題に対する要求水準および課題成功に関するイメージの具体性としてのポシブル・セルフを問うものである。質問項目は、第4ページと同じである。

第11ページ 課題終了後の課題に対する関与度および課題終了後の現実の自己の状態を問うものである。質問項目は第3ページに準じたものである。

実験手続き 個別実験による。

実験者は、被験者に自尊感情尺度へ回答させた後、課題内容とそのやり方を説明した。説明は以下のとおり。「いまから大小分類検査という課題を行っていただきます。この課題は、視覚および触覚による物の大きさの弁別と分類作業の速さを検査するものです。“はじめ”の合図があったら、利き手でコインを一つづつつまんで、箱の穴の中に入れていただきます。50個のコインがありますので、1分間のあいだにできるだけ速く、できるだけ多くのコインを箱の中に入れるという課題です。」

このように説明した後、課題に対する関与度とポシブル・セルフの測定(第1回)を行った。続いて、要求水準の測定(第1回)を行った後、以下のよ
うな実験教示を行った。

「いまから大小分類検査を行っていただきます。この課題は、視覚および触覚による物の大きさの弁別と分類作業の速さを検査するものです。まず、利き手ではない方の手で箱をしっかりと押さえて下さい。“はじめ”の合図

があったら、利き手でコインをひとつずつつまんで、箱の穴に入れていってください。50個のコインがありますので、1分間のあいだにできるだけ速く、できるだけ多くのコインを箱の中に入れてるようにしてください。なお、一度に複数のコインを持たないように、必ずひとつずつ手にとって穴に入れるように注意して下さい。用意はよろしいですか？それでは、はじめ。」

こうしてまず、第1回目を遂行させた（第1回目の試行）。以下、同様に、要求水準の測定と、課題の遂行をそれぞれ2回繰り返した。そして、再度ポシブル・セルフの測定を行った。その後、先と同様、要求水準の測定と課題遂行をそれぞれ3回繰り返し実験を終了した。

したがって、実験手順をまとめると以下のようなになる。

1. フェイス・シートへの記入
2. 自尊感情尺度への記入
3. 課題（大小分類検査）の説明
4. 第1回目の関与度とポシブル・セルフの測定
5. 第1回目の要求水準の測定、実験教示、課題の遂行（第1回）
6. 要求水準の測定と課題の遂行（第2回）
7. 要求水準の測定と課題の遂行（第3回）
8. 第2回目の関与度とポシブル・セルフの測定
9. 要求水準の測定と課題の遂行（第4回）
10. 要求水準の測定と課題の遂行（第5回）
11. 要求水準の測定と課題の遂行（第6回）
12. 第3回目の関与度と課題終了後の自己の状態の測定

結果

要求水準の指標について

ここでは、要求水準と目標差スコア（GDスコア）を取り上げた。GDスコアは、第 $n-1$ 試行における成績（ A_{n-1} ）から第 n 試行における成績を予想させたとき、その予想成績（ G_n , 要求水準）と A_{n-1} との差をいう。GDスコアは、前試行の成績に比べて要求水準が上昇したか下降したかを示すものである。

自尊感情尺度について

自尊感情尺度10項目の α 係数は、.60であった。したがって、それほど高いとはいえず、尺度の一次元性には疑問が残る。しかしながら、自尊感情尺度10項目の因子分析（バリマックス回転による）を行った結果、4因子が抽出され、以降の分析の煩雑さを避けるため、10項目の合計得点によって、自尊感情の高低の2群を抽出することにした。

自尊感情尺度10項目の合計得点の被験者の平均点は、39.5 ($SD=3.98$) で、レンジは、32~47であった。男女別では、男子39.9 ($SD=4.60$)、女子39.1 ($SD=3.13$) であった。男女間の得点に有意差はみられない ($t=.58$, $df=34$, ns)。したがって、自尊感情得点40点以上を高自尊感情群 ($n=19$)、39点以下を低自尊感情群 ($n=17$) とした。

課題への関与度

課題への関与度は、3つの尺度（興味がある、面白そう、得意な方だ）の合計点を関与度得点とした。

1. 自尊感情得点とポシブル・セルフ、要求水準、GDスコア、課題成績、課題への関与度との関連について

自尊感情得点とポシブル・セルフ、要求水準、GDスコア、課題成績、課題への関与度との相関をそれぞれ表1～5に示した。

表1. 自尊感情得点とポシブル・セルフ得点との相関

	第1回ポシブル・セルフ得点	第2回ポシブル・セルフ得点	課題終了後の自己の状態
自尊感情得点	.50**	.40*	.25

* $p < .05$ ** $p < .01$

表2. 自尊感情得点と要求水準との相関

	前半3回の要求水準	後半3回の要求水準	全6回の要求水準
自尊感情得点	.22	.28	.27

* $p < .05$ ** $p < .01$

表3. 自尊感情得点とGDスコアとの相関

	第1・2 GDスコア	第3・4・5 GDスコア	全GDスコア
自尊感情得点	.26	.36*	.33*

* $p < .05$ ** $p < .01$

表4. 自尊感情得点と課題成績との相関

	前半3回の課題成績	後半3回の課題成績	全6回の課題成績
自尊感情得点	-.05	-.05	-.05

* $p < .05$ ** $p < .01$

表5. 自尊感情得点と関与度得点との相関

	第1回関与度得点	第2回関与度得点	第3回関与度得点
自尊感情得点	.31	.12	.21

* $p < .05$ ** $p < .01$

自尊感情得点は、ポシブル・セルフと正の相関がみられた。特に、ポシブル・セルフの1回目との相関が高い。また、後半の3から5回のGDスコアと正の相関がみられた。自尊感情得点は、要求水準そのもの、あるいは課題成績とは相関がみられていない。

次に、自尊感情の高低群別にGDスコアを示したのが、表6である。自尊感情高群は、前試行の成績よりも要求水準を高く設定し、低自尊感情群は、前試行の成績よりも要求水準を低く設定していることがわかる。

表6. 高自尊感情群・低自尊感情群におけるGDスコア (SD)

	第1・2 GDスコア	第3・4・5 GDスコア	全GDスコア
高自尊感情群 ($n=19$)	4.4(9.50)	-0.1(9.53)	1.7(8.88)
低自尊感情群 ($n=17$)	-5.3(13.15)	-9.8(12.37)	-8.0(12.20)

2. ポシブル・セルフと要求水準、GDスコア、課題成績との関連について

ポシブル・セルフと要求水準、GDスコア、課題成績との相関をそれぞれ表7～9に示した。

表7. ポシブル・セルフ得点と要求水準との相関

	前半3回の 要求水準	後半3回の 要求水準	全6回の要求水準
第1回ポシブル・ セルフ得点	.23	.08	.17
第2回ポシブル・ セルフ得点	.19	.51**	.38*
課題終了後の 自己の状態	.11	.46**	.31

* $p < .05$ ** $p < .01$

表8. ポシブル・セルフ得点とGDスコアとの相関

	第1・2 GDスコア	第3・4・5 GDスコア	全GDスコア
第1回ポシブル・ セルフ得点	.08	.08	.08
第2回ポシブル・ セルフ得点	.21	.43**	.36*
課題終了後の 自己の状態	.21	.38*	.33

* $p < .05$ ** $p < .01$

表9. ポシブル・セルフ得点と課題成績の相関

	前半3回の 課題成績	後半3回の 課題成績	全6回の課題成績
第1回ポシブル・ セルフ得点	.16	-.04	.06
第2回ポシブル・ セルフ得点	.18	.15	.17
課題終了後の 自己の状態	.10	.27	.19

* $p < .05$ ** $p < .01$

ポシブル・セルフ得点は、特に後半の試行における要求水準と有意な相関を示している。また、同様に、試行の後半におけるGDスコアとも有意な相関を示している。

3. 課題への関与度と要求水準、GDスコア、課題成績との関連について

課題への関与度と要求水準、GDスコア、課題成績との相関をそれぞれ表10～12に示した。

表 10. 関与度得点と要求水準との相関

	前半3回の 要求水準	後半3回の 要求水準	全6回の要求水準
第1回関与度得点	.13	.41*	.29
第2回関与度得点	.02	.27	.16
第3回関与度得点	.04	.34*	.21

* $p < .05$ ** $p < .01$

表 11. 関与度得点とGDスコアとの相関

	第1・2 GDスコア	第3・4・5 GDスコア	全GDスコア
第1回関与度得点	.04	.21	.14
第2回関与度得点	-.03	.05	.02
第3回関与度得点	.04	.14	.10

* $p < .05$ ** $p < .01$

表 12. 関与度得点と課題成績の相関

	前半3回の 課題成績	後半3回の 課題成績	全6回の課題成績
第1回関与度得点	.34*	.42**	.40*
第2回関与度得点	.34*	.38*	.38*
第3回関与度得点	.22	.41*	.33

* $p < .05$ ** $p < .01$

表12に示したように、課題の実際の成績と関与度得点には、有意な相関が得られた。特に、関与度は、後半の試行における課題成績と相関が高い。これは、課題成績がよいほど、課題への関与度は高まる傾向にあること、また、課題への関与度が高いことが実際の課題への取り組みと成績に好影響を与えていることを示している。また、関与度は、関与度得点の1回目と後半の要求水準、関与度得点の3回目と後半の要求水準との間にも有意な相関が得られた。

ここで、要求水準、GDスコア、課題の実際の成績の3つを予測するのに、自尊感情得点、ポシブル・セルフ得点、関与度得点のいずれが最も有効であるかについて、重回帰分析を行った(ステップワイズ法による)。要求水準、GDスコア、課題の実際の成績のそれぞれを基準変数とし、自尊感情得点、ポシブル・セルフ得点、関与度得点を説明変数とした。要求水準の場合、第1説明変数はポシブル・セルフ得点であり、重相関係数Rは.34 ($p < .05$)であった。また、GDスコアの場合、第1説明変数は自尊感情得点であり、重相関係数Rは.33 ($p < .05$)であった。さらに、実際の成績の場合、第1説明変数は関与度得点であり、重相関係数Rは.43 ($p < .01$)であった。

重回帰分析の結果、特に、実際の成績と関与度得点との関連が強く示されている。また、GDスコアは、自尊感情得点と強く関連していることが示さ

れた。

なお、各試行ごとの要求水準とそのイメージの明瞭性を表13に示した。

表 13. 各試行における要求水準 (SD) とそのイメージの明瞭性

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回
要求水準	50.8 (19.12)	42.2 (13.71)	43.7 (13.47)	45.7 (13.92)	45.9 (14.89)	46.2 (14.04)
イメージ の明瞭性	3.1	4.0	4.1	4.0	4.1	4.1

第1回目においては、要求水準は高いがイメージの明瞭性は低い。実際に課題を遂行した後の第2回目は、要求水準は下がるもののイメージの明瞭性は上がっている。そして、その後要求水準を徐々に上げていく傾向が示されるが、イメージの明瞭性には大きな変化はみられない。

各試行ごとの課題成功に関するイメージの明瞭性の結果については、表14に示した。

表 14. 各試行における課題成功に関するイメージの明瞭性

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回
80-100%	2.4	1.6	1.4	1.4	1.3	1.4
60-80%	3.4	2.3	2.2	2.5	2.1	2.0
40-60%	3.8	3.5	3.7	3.4	3.6	3.5
20-40%	3.3	3.8	3.7	3.5	3.4	3.6
0-20%	2.6	2.6	2.1	2.2	2.3	2.2

第1回目における40~60%を頂点としたイメージの明瞭さが、第2回目以降、20~40%の方向に移行して、その基本的傾向が第6回目までほぼ維持されている。

考察

1. 要求水準とポシブル・セルフ、自尊感情

ポシブル・セルフは、自尊感情得点と相関がみられ、自己に高い価値をおいているものほど、肯定的なポシブル・セルフ、すなわち自己に対する肯定的な見通しを持っていることが示された。しかし、自尊感情得点は要求水準との間に有意な相関はなく、試行の後半におけるGDスコアとの間にのみ相関がみられた。これに対し、ポシブル・セルフは、後半の試行における要求水準およびGDスコアと有意な相関を示している。このことは、自尊感情得点より、ポシブル・セルフが、自己の将来的な見通しをよりの確に反映していることを意味しており、当初の予測をほぼ支持していると考えられる。

このように、ポシブル・セルフは、比較的固定的な自己概念と具体的な行動をつなぐ橋渡しの役割を果たしているといえる。つまり、自尊感情では説明し得ない、状況即応的の自己としてのポシブル・セルフ概念の有効性が示唆された。

自尊感情の場合、要求水準ではなく、GDスコアとの関連がみられる。これは、表6に示されるように、自尊感情の高い人は、実際の課題の成績を上回る目標を設定しがちなのに対し、自尊感情の低い人は、実際の課題の成績を下回る目標を設定しがちなことと関連している。つまり、自尊感情の高さは、目標差スコアの正負、つまり、ある種の固執性と関連があるように思われる。また、本実験では、要求水準を百分率で尋ねた。このことが結果を一

部規定したように思われる。つまり、被験者は、概して10%きざみで要求水準を回答することが多く、課題の実際の成績（個数）に即した要求水準を設定しにくかったきらいがある。ただし、このことがかえって、自尊感情の高低によるGDスコアの明瞭な違いを生みだした可能性もある。

実際の成績との関連については、自尊感情得点とポシブル・セルフのいずれも課題成績との間に有意な相関はみられない。特に、自尊感情と実際の成績とは無関連といってよい。ポシブル・セルフが、課題の実際の成績と相関がみられなかったことは予想外であった。したがって、ポシブル・セルフは、あくまで課題を遂行するにあたっての要求水準に関わるものであり、課題への取り組みや実際の成績を予測するものではないとことが明らかとなった。ポシブル・セルフは、操作可能な変数であるとは言い難く、概念としての実用的な有効性は示されなかったといえよう。この点に、ポシブル・セルフの一定の限界もみられるように思われる。

もちろん、本研究におけるポシブル・セルフの測定が、自己の可能性としてのポシブル・セルフの概念に十分適合していたか、測定の仕方が妥当であったかなど、今後さらに検討する必要がある。

2. 課題の実際の成績と関与度との関連

課題成績は、課題の被験者自身にとっての関与度（課題への関与度）との関連が最も強く示された。特に、試行の前半よりも後半において関与度と課題の成績との相関が高くなっている。このことは、自己にとって課題への関与度が高いと、課題に対して熱心に取り組むため、課題成績がよりよいものとなる可能性を示唆している。また、試行につれて、課題成績がよい（悪い）ことによって、被験者が、自己にとっての課題の関与度を高める（低める）可能性があることをも示している。

これは、Tesser (1984) の自己評価維持モデルの考えとも合致している。自己評価維持モデルの考えは、自己と心理的に近い（遠い）他者の存在を前

提に論が展開されている。本研究の結果は、他者が存在しない、他者との比較がなされない状況においても、人が、自己のよさを維持しようとして、課題への関与度を変えようとする傾向のあることを示唆している。

つまり、課題や活動内容の自己にとっての関与度が、個人の動機づけ要因として重要であることが確認された。自己にとって、課題がどのような意味あいを持つか、自己規定にとっての課題がどのような重要性をもつかは、自己のよさを維持しようとする個人にとって欠くことのできない視点である。今後は、単独の実験事態ではなく、他者が、特に心理的な近さの異なる他者が存在する状況を設定し、関与度と課題遂行、さらに目標水準との関連について検討をする必要がある。

3. 自尊感情、ポシブル・セルフ、課題の関与度、GDスコアの相互関連

さて、以上の考察から、自尊感情、ポシブル・セルフ、課題の関与度、GDスコアの相互関連に関する模式図を描くと図1のようなものが考えられる。

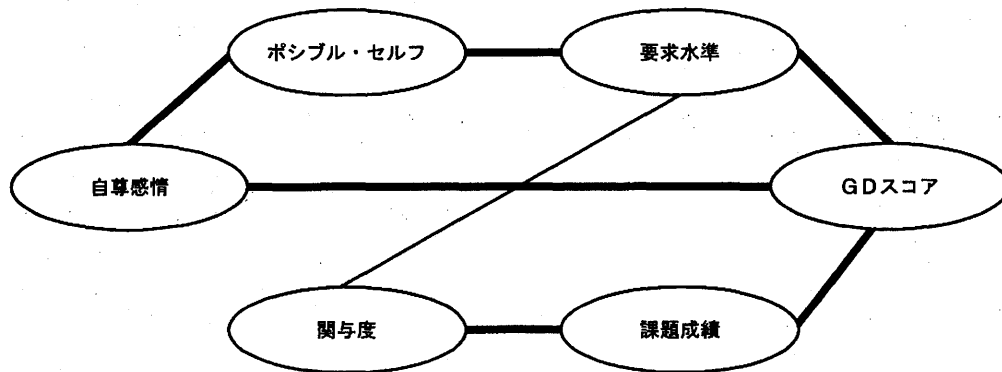


図1. 自尊感情、ポシブル・セルフ、要求水準、関与度、課題成績、およびGDスコアの各要因間の相互関連を示す模式図

すなわち、自尊感情がポシブル・セルフと密接に関わり、ポシブル・セルフが要求水準に影響を与える。また、課題の関与度が、課題成績に影響を与え、要求水準と課題成績によってGDスコアが決定されるとともに、自尊感

情もGDスコアに影響を与えている。したがって、ポシブル・セルフだけでなく関与度もいくぶんか要求水準に影響を与え、GDスコアを規定するとともに、自尊感情が、直接的にGDスコアを規定するという2つの側面があることが推測される。今後、こうした力動的な理解を促す検討がさらに必要であると思われる。

引用文献

- Atkinson, J. W. 1964 *An introduction to motivation*. New York: D. Van Nostrand.
- Bandura, A. 1977 *Social learning theory*. New York: Prentice-Hall. 原野広太郎
(監訳) 1979 社会的学習理論 金子書房
- Gergen, K. J. 1972 Multiple identity: The healthy, happy human being wears many masks. *Psychology Today*, 5, 31-35, 64-66.
- Markus, H. (金川智恵訳) 1991 ポシブル・セルフ 三隅二不二・木下
富雄(編) 現代社会心理学の発展II ナカニシヤ出版 pp.38-60.
- Markus, H., & Nurius, P. 1986 Possible selves. *American Psychologist*,
41, 954-969.
- 落合孝子 1979 達成動機と要求水準・性格特性について 日本教育心理
学会 第21回総会発表論文集, pp574-575.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton:
Princeton University Press.
- 佐治守夫 1951 要求水準と現実度 心理学研究, 21, 56-59.
- 関 計夫 1974 要求水準の研究 金子書房
- 高木貞二(編) 1958 心理学研究法 岩波書店
- Tesser, A. 1984 Self-evaluation maintenance processes: Implications for
relationships and for development. In J. C. Masters & K. Yarkin-Levin
(Eds.), *Boundary areas in social and developmental psychology*. New York:

Academic Press. pp.271-299.

Tesser, A., & Campbell, J. 1982 A self-evaluation maintenance to school behavior. *Educational Psychologist*, **17**, 1-12.

Tesser, A., & Campbell, J. 1983 Self-definition and self-evaluation maintenance. In J. Suls & A. Greenwald (Eds.), *Social psychological perspective on the self*. Vol.2. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates. pp.1-31.

山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.

**Relationships among self-esteem, possible selves, task
relevance and level of aspiration
(English Résumé)**

**Mikitoshi Isozaki
Norihiro Kuroishi**

Previous research on the self centered on stable aspects of the self concept (e.g., self-esteem), while neglecting those aspects of the potential or "possible selves" (Markus & Nurius, 1986). In Markus & Nurius' (1986) new model of the self, the self concept includes "possible selves", referring to cognitions on the possibility of the self in the future, such as "ideal self image one wishes to be in the future," "self image one possibly will be," and "self image one wishes not to be." Because possible selves play important roles in human behavior, this study examined the extent of the concept's efficiency in explaining psychological outcomes such as task performance or level of aspiration.

Markus & Nurius (1986) insist that possible selves mediate between stable self concepts and human behavior. Thus, possible selves are cognitive components (e.g., hope, fear, goal, motive, and desire). In this study, the relationships among the stable self concept, possible selves, the level of aspiration, and a performance on a brief task were examined. The effects of task relevance (Tesser & Campbell, 1983) were also examined.

Method

All thirty-six (16 female, 20 male) undergraduates at International Christian University (ICU), Japan, performed an individually and completed the questionnaire.

The experimental task involved a series of "Small-big" classification tests (Takei Co.), in which subjects were required, within one minute, to classify 50 metals into a box with 5 slots of different size. The questionnaire consisted of five components: (a) demographic information, (b) self-esteem scale (Rosenberg, 1965), (c) task relevance scale (e.g., "Are you interested in this task?"), (d) possible selves scale (e.g., "I am disappointed with the result") and (e) level of aspiration scale (see Takagi, 1958).

Results and Discussion

1. Statistically significant correlations were found between the self-esteem score and the possible selves score ($r=.50, p<.01$), and between the possible selves score and level of aspiration ($r=.51, p<.01$). On the other hand, a significant correlation was not found between self-esteem score and level of aspiration ($r=.28, ns$). These results show that the possible selves mediates between the stable self concept (self-esteem) and motivation (level of aspiration).

That is, possible selves but not self-esteem, can predict higher level of aspiration. This implies that the concept of possible selves is efficient in explaining psychological outcomes such as level of aspiration. The concept of possible selves, however, had no significant association with performance on the task ($r=-.05, ns$). This further means that possible selves are not predictive of performance on the task. Because possible selves cannot be directly manipulated, the limitation of "possible selves" needs to be recognized.

2. The performance on the task had a significant correlation with no other than the relevance on the task ($r=.42, p<.01$). This implies that high relevant task to the subject's self-definition makes him/her work hard on the task, and that higher (lower) performance one achieves on the task, the higher (lower) relevance he or she will lay on the task.

3. The implications discussed above can be summarized as follows.

Self-esteem is related to possible selves, and possible selves influence level of aspiration. On the other hand, task relevance has influences on performance. The level of aspiration and performance determine GD (goal discrepancy) score, which, in turn, is influenced by self-esteem. Further research is needed to enhance an understanding of the dynamic relationship between self-concept and human behavior.